成都方言の文法研究

——文法化のアプローチ

（論文概要）

熊　　進

本研究は成都方言の文法化(grammaticalization)を分析するものである。文法化とは、狭義には、一般に名詞や動詞など具体的内容を表す内容語、あるいは語彙項目が文法的機能を担う機能語、あるいは文法語に変化していく言語変化現象である。広義には、機能語からより文法的意味をもつ語に転化するプロセスや文が機能語に転化するプロセスも加わる。

本研究は大きく分ければ、三つの部分から構成されている。序章は本研究の作成動機や研究背景の説明。第1章から第4章までは本論であり、文法化のケース・スタディーとして、「動詞連続」、「語気助詞」、「副詞」、「アスペクト」の四つの項目を立て、成都方言の文法化を分析する。終章では、本論部分をまとめ、虚化、再分析、類推、言語接触、音韻変化などの問題を再検討し、今後の課題を提起する。なお、その内容は次のようにまとめている。

序　　章

成都方言は西南官話の下位分類の一つであり、音韻と語彙の面では早くから研究されてきた。音韻と語彙の研究と比べ、成都方言文法の研究は極めて少ない。80年代以後、一部の方言研究者はようやく成都方言の文法に着目し、研究を始めた。しかし、これらの研究は言語事実の記述に集中し、文法の様相を描くことにとどまり、文法現象に対する解釈は欠けていると言わざるを得ない。文法事実を記述すると同時に、文法現象に対する解釈を行っていきたいというのが本論文の研究動機である。

本研究は文法化理論を方法論とする。中国語学領域において、「文法化」と関連のある概念として、「虚化」という馴染み深い概念がある。王力の《漢語史稿》は歴史文法に絞って論述したものであり、文法化の研究にもヒントを与えるところが多い。1989年出版の《漢語語法史》では、王力はさらに“多數介詞和連詞都是由實詞虚化而成的”(多くの介詞と連詞は実詞から虚化されてきた)と指摘し、“実詞虚化”のいくつかの経路を提示している。しかし、王力は文法形式が生まれたメカニズムをある程度解釈していたものの、その変化の規則を一般化することはできず、中国語における新しい文法形式生成の一般規則への探求を後世に残していた。

第1章　動詞連続

動詞連続は中国語の文法化と深く関わっており、動詞をソースとした多くの機能語は「動

詞―連動文（動詞連続）―機能語」という過程を経由して、最終的に機能語になったと指摘されている。すなわち動詞が動詞連続の構造から文法化されることは、中国語の文法化における一つの普遍的プロセスとして捉えられている。第1章では、動詞連続と関わる“拿給”、“来”の文法化プロセスを検討し、“得V”と“V得”における意味上の相関関係も考察する。

第1節　“拿給”の受動化

GIVEという意味を持つ授与動詞は多くの言語において、文法化され、さまざまな文法的機能をもつようになっている。成都方言の“拿給”は、授与動詞以外にも、許容・放任を表す使役マーカーと受動マーカーとしての文法的機能を果たしている。例えば、

1) 各人走各人的路，拿給他們說去。　（使役）
　自分の道を歩むと、彼らに言わせよう。
2) 酒拿給他喝了。　（受動）
　お酒を彼に飲まれた。

この兼用の形成について、筆者は北京語の“給”の受動化からヒントをもらい、「授与→使役→受動」というような過程を経由してきたと主張し、その具体的プロセスについて次のように提案した。

Stage1:　甲＋拿＋N＋給＋乙
Stage2:　甲＋拿給＋乙＋N
Stage3:　甲＋拿給＋乙＋N＋V
Stage4:　拿給＋乙＋V
Stage5:（N）＋拿給＋乙＋V＋結果補語（完成相マーカー）

第2節“来”の多義性

一般には、一つの語が異なった二つ以上の意味をもっていることを多義性と呼び、そのような語を多義語と称する。認知言語学では、多義語の各意味同士の間で見られる家族類似性を観察し、その多義性をもたらす動機付けを研究の対象としている。

成都方言における“来”は「来る」という意味の動詞以外にも、次のように複数の意味で使われている。

3) 唱來給大家聽。　（目的）
　皆のために歌う。
4) 唱來喉嚨都沙了。　（補語）
　歌を歌って、のどがかすれた。

5）炒來吃好吃，煮來吃不好吃。　（方式）
炒めたら、美味しいが、煮たら、美味しくない。

以上の 3 例の“來”はそれぞれ「目的マーカー」、「補語マーカー」、「方式マーカー」としての文法機能を持っている。本節は“來”の複数の意味機能を検討し、これらの“來”を“Event 1 来 Event 2”という統一したモデルに納入し、「Event1 という行為（状態）を完成させ、Event2 という行為（状態）に到達する」というスキーマを抽出した。この事態の連鎖は認知主体の読み込み・解釈によって、さまざまな意味に読み取られると考える。

“來”が文法化された過程は“來”の多義性が生まれた過程でもある。このプロセスを次のように考えられる。

＞　補語マーカー
空間移動を表す“來”＞　完成相マーカー　＞　目的マーカー
＞　方式マーカー

第 3 節　“得 **V**”と“**V** 得”

助動詞は「根源的」（root）意味と「認識的」（epistemic）意味と二つの意味を持っているという事実が類縁関係のない多くの言語で証明されている。「根源的」意味とは現実における義務、許可、能力などを表す意味のことであり、「認識的」意味とは、推論における必然性、可能性を表す意味のことである。

成都方言の“V 得/V 不得”は能力、許可を表し、すなわち、「根源的」意味を持っているが、「認識的」意味を持っていない。それに対して、“得 V/不得 V”は可能、推測を表し、すなわち「認識的」意味を持っているが、「根源的」意味を持っていない。両者は意味上補い合っている。

項　目	「根源的」意味	「認識的」意味
得 V	×	○
V 得	○	×

本節では、Sweetser（1990）の研究を元に、“得 V/不得 V”と“V 得/V 不得”を認知的視点から議論を行った。「根源的」意味を表す“V 得/V 不得”と「認識的」意味を表す“得 V/不得 V”は同じイメージスキーマを共有し、平行的に扱い、統合的理解をすることができると考え、“得 V/不得 V”と“V 得/V 不得”を統合的に捉えた。

第 2 章　語気助詞

語気助詞は主に話し手の気持ちを表す文法的働きを果たしている。成都方言でよく使われる語気助詞は十数種もあるが、本章では、名詞から文法化したもの（時間を表す“時”から条件節マーカーの“嗒”になった例）、動詞から文法化したもの（「言う、話す」の意味を持つ動詞“説”から文末語気助詞の“説”になった例）、文から文法化したもの（“該

是哈”から“ 嘎”になった例）をそれぞれ一例ずつ選び、その文法化の過程について分析する。

第 1 節　語気助詞“ 啥”

成都方言には、“ 啥”という 語気助詞がある。“ 啥”は条件節マーカーとして、仮説的用法と反事実的用法を持っている。また、已然の事態を表すこともできる。已然の事態を表す場合、後件で表す事態は主語が意図的にコントロールできない事態であり 、期待に反することが多い。

中古から近世において、条件表現を表す“ 時”があった。近世まで使われてきたこの用法が現代北京語から消えたが、方言の中で、なんらかの形で跡を残していると考えられる。複数の方言データから見て[s]や[z]で始まる条件表現を担う 語気助詞は、歴史上条件を表す“ 時”と関連があることが強く示唆されている。成都方言の“ 啥”もこの“ 時”のバリエーションの1 つであると考え、音韻や意味の面から、論証を行った。

第 2 章　機能語としての“ 説”

成都方言では、“ 嗦”という 文末に位置する機能語がある。例えば、

6) 他來了嗦?
　彼が来たのか?　/　彼が来たって?

7) 你已經還他了嗦 ?
　もう 彼に返したのか?　　/　もう 彼に返したって?

本稿では、閩南語の“ 講[kong^{2}]”との対照により 、“嗦”は動詞の“ 説”から文法化されたものだと主張する。さらに、“嗦”(“ 説”) で表すさまざまなモダリティの関連を次のように把握する。

＞詰問調問いかけ
確認的問い返し　＞　擬似問い返し　＞提案・ 依頼　　＞揶揄的表現
＞驚嘆・ 発見

すなわち、問い返し疑問のモダリティは各モダリティの出発点とされる。相手から発話があったようなふりをして、問い返しの口調で相手を試す場合、擬似問い返し疑問文になる。事実を把握していて、問い返しの口調がもっと肯定に傾く場合、詰問調の問いかけになる。問い返して、相手に判断を委ねる場合、提案や依頼の働きかけという 効果が生じる。提案が明らかに相手の遂行可能範囲を超えた場合、揶揄的口調になる。また、思わぬ状況に遭遇する場合、相手目当てではなく 、自分が自分に問い返す、つまり 自問自答の場合、独り 言ふう の発見･驚嘆のモダリティになる。

第 **3** 節 “ 該是哈” から “ 嘎” へ

成都方言では、文末に置かれる “ 該是哈” があり 、自分の判断・ 認識を聞き 手に提示し 、聞き 手の確認を強く 要求することで、押し 付けか気付かせの機能を果たしている。

8）你昨天沒去，該是哈。 （ 押し 付けの意味）
あなたは昨日行かなかったよ ね。
9）已經到點了，該是哈。 （ 気付かせの意味）
もう 時間になったよ ね。

慣用化された “ 該是哈” は音韻変化を経て、文末語気助詞に変わっていく 。そのプロ セスは次のよう になっている。

Stage1. ［kai^1 $s\eta^4$ xa^3］⇒［$k\varepsilon^3$ s xa^3］
Stage2. ［$k\varepsilon^3$ s xa^3］⇒［$k\varepsilon^3xa^3$］
Stage3. ［$k\varepsilon^3xa^3$］⇒［ka^3］

第 **3** 章 副 詞

本章では、朱德熙の副詞に関する定義に基づき 、次の二つの現象を取り 上げ、分析する。

1. 文語にみる主述の独立性を取り 消す “ 之” は成都方言において、副詞化され、程度を表すよう になった。

2. 成都方言を含む多く の南方方言では、程度を表す副詞 “ 好” は常に “ 多”、“ 久” などの形容詞と組み合わされ、語彙化の過程を経て、“ 好多”、“ 好久” などのよう に疑問詞となっている。

第 **1** 節 指示・ 程度と疑問の重なり

成都方言では、文脈がない場合、“ 好久”、“ 好多” を用いる疑問文は意味上曖昧である。例えば、“ 他來了好久了？” は是非疑問文か特指疑問文に解釈されることが可能である。是非疑問文として理解する場合、“ 他來了很久了？ ” に相当し 、特指疑問文として理解する場合、“ 他來了多久了？ ” に相当する。

しかし 、是非疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” と特指疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” は形式上同じ であるが、異質なもの である。是非疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” は “ 好＋久”、“ 好＋多” というよう に、“ 程度副詞＋形容詞” の構造を持っている。一方、特指疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” はそれぞれ一つの疑問詞であり 、“ 好” と “ 多”、“ 久” の間で切れ目がなくて、境界線を引くことができない。

本稿は形式が共通していることから出発し 、特指疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” は是非疑問文の中の “ 好久”、“ 好多” から由来したと推測し 、語用論的解釈を試みた。

第 **2** 節 “ 之”の副詞化

成都方言の口語ではしばしば程度を表す副詞“ 之”が用いられる。例えば、

10）那感情之真誠，之熱情，可以說難以言狀。
あの気持ちのとても誠実なこと、とても情熱的なことは、言葉では言い難い。
11）街上人多，公共汽車之擠喲！
街頭は人が多くて、バスはとても混んでいるよ！

本節では、成都方言の副詞“ 之”は文語中主述の独立を取り消す“ 之”から由来したと主張する。その副詞化の過程を次のように提案する。

成都方言における“ 之”の副詞化は文語の“［NP+之+VP］$_{NP}$ + ……”より始まった。程度が最高点に達したこのとき、話者は往々に述語部分を省略した形式を用いて、「言葉では言い表しがたい」態度で程度が極めて高いことを示す。語用を通して、“［NP+之+VP］$_{NP}$ + ……”の理解が“［NP+之+VP］$_{NP}$ ⇒ 程度が高い”へと慣用化していった。この語用論的語義に基づいて、類推と再分析を通して新たな句構造“ NP+[之+VP]”に辿りつくことができた。この構造において、“ 之”は「程度が高い」ことを表す機能を獲得し、並びにこの機能を“ V得+之+補語”の動補連語まで拡張している。

機能の拡張は“ 之”がすでに完全に文語の助詞から離脱し、一つの副詞性成分と成ったことを意味する。

第 4 章　アスペクト

アスペクトを表す機能語は、方言によってかなり異なっている。その由来は、標準語と共通なものもあれば、全く関連のないものもある。本章では、成都方言の“ 倒”、“ 得有”、“ 沒得”など標準語と異なったアスペクトを表す文法形式に絞って、これらの機能語の文法化について議論した。

第 **1** 節 “ 到”から“ 倒”へ

南方方言では、動詞の後ろにある上声の“ 倒”があって、仮位可能補語、完成相標識、持続相標識などの機能を果たしている。この南方方言に広く分布している“ 倒”の来源について、“ 倒”は“ 到”に由来するものだと多方言にわたる類型論的研究によって、明らかになっている。本節では、100 年前の四川方言を反映している《西蜀方言》と《華英聯珠分類集成》から、この二冊に見る機能語としての“ 倒”の文例を集め、動詞“ 到”は“ 趨向補語”を経由して、動相補語、持続体標識、完成体標識などに拡張するという文法化の過程は声調が変わっていく過程と一致していることを指摘し、声調から見る文法化の進む度合いを検討した。

＞仮位補語
＞持続体標識＞進行体
到:“ 至”義動詞＞趨向補語＞動相補語＞完成体標識
＞補語標識
｜———dao^4———　dao^4 , dao^3 ——————dao^3————｜（ 成都方言）

第 2 節 「 進行･状態」を表す“ 在”

存在動詞が進行･状態を表す文法標識にシフトされるのが多くの類縁性のない言語に見られる一般的傾向の一つである。成都方言も、存在動詞“ 在[dzai^3]”で進行･状態を表している。

12）我削倒蘋果在。
私はリンゴを剥いている。
13）屋頭開起燈在。
部屋に電気が付いている。

本節は「 フィギュア(図)」と「 グラウンド(地)」という認知言語学の概念を引用して、存在動詞“ 在”から、アスペクト標識に変化するメカニズムを考えた。

第 **3** 節 “ 得有”の文法化

文法マーカーの形成は、無方向で恣意的な過程ではない。その裏に、認知的動機付けが働いている。“ 領有、存在”を表す“ 有”が完成相を表すのは中国語だけではなく、ほかに多く類縁性のない言語にも見られる文法化の傾向の一つである。動詞“ 有”は「 過去に獲得した」と「 現在、領有している」という「 過去」と「 現在」を繋げ、完成相の概念に近い。
成都方言では、次のように“ V 得有(NP)”という文法形式がある。

14) 桌子上放得有一封信。
机の上に一通の手紙が置いてある。
15) 日語書我買得有。
日本語の本は買ってある。

本節ではこの“ 得有(NP)”をアスペクト標識と見なし、歴史文献から見る相関形式を探し出し、その文法化の認知的動機づけをめぐって、文法化の経路を検討する。この文法化は再分析の過程であり、切れ目が次のように変わった。

[V 得[有＋O]]　⇒　[[V 得有]＋O]

第 **4** 節“ 沒得”の機能拡張

現代成都方言の“ 沒得”、“ 沒有”はほとんど同じ意味機能を持つ同義語と見なされている。

16）放暑假，學校頭沒得（沒有）人。

夏休み中なので、学校には人がいない。

17) 廠頭這個月還沒得（沒有）發錢。

工場は今月の給料をまだ出していない。

本節では、百年前宣教師が作った四川方言の教科書《西蜀方言》のデータに基づき、“ 沒得”はもともと例 17）のように完成相の否定としての機能を持っていなかったが、“ 沒有”と同様に「 存在の否定」という機能を持っているため、類推され、機能拡張をしたと主張する。その動機付けはいわゆる“ 相因生義”という類推作用だと考えられる。

終　　章

序章以来中国語学研究においてなじみ深い概念としてしばしば「 虚化」に言及した。王力や太田辰夫らの虚化と本論文が言っている文法化の関係を考え、“ 虚化”と“ 文法化”の相違を述べた。

再分析と類推は文法化のもっとも基本的で重要な手段としてよく取り上げられている。ここでは、各章で議論した再分析と類推の現象をまとめ、特に再分析に重点を置き、「 地と図の反転」による文の内部構造の変化も再分析の一種だと指摘した。

新しい文法形式をもたらした原因の一つとして、言語接触もよく取り上げられているが、言語（ 方言）同士が類似の文法形式を持つことは必ずしも言語接触によるものではない。新しい文法形式が生まれた動機付けを言語（ 方言）内部から求めるか、それとも外部から求めるか、慎重に考察しなければならない。本稿は成都方言の実例から、この問題を考えた。

音韻変化は文法化の過程において、よく見られる現象である。標準語では、語彙的内容を持つ語は文法化に伴い、音節の短縮化や声調の軽声化などの現象を起こすことがよく観察される。本稿は成都方言のような軽声を持たない方言では、文法化の過程において、声調の変化が常にあったと指摘した。

中国語研究の分野においても、この数年、文法化の研究が増えてきている。しかし、方言を対象とした体系的な文法研究は少なく、西南官話のデータもほとんど利用されていない。その空白をうめるのが、本論文の目的である。ただ、成都方言に関する歴史的資料が少ないため、今の段階では、歴史的に遡ることができない語源が不明な文法形式がいまだに多く存在しており、今回の論文で議論することができなかった。これらの文法形式に関する研究は今後の課題にしたいと思う。